2023 年度 個人研究実績・成果報告書

2024 年　　4 月　　30 日

所属	基盤教育機構	職名	准教授	氏 名	枡岡　大輔
研究課題	文化創造の原理および方法の哲学探究				
研究キーワード	文化創造　新しい商い	当年度計画に対する達成度	3.概ね順調に研究が進展し、一定の成果を達成したが、一部に遅れ等が発生した		
関連する SDGs項目	3. すべての人に健康と福祉を	4. 質の高い教育をみんなに	11. 住み続けられるまちづくりを	17. パートナーシップで目標を達成しよう	

１．研究成果の概要

2023 年度の主たる研究目標は「文化創造」の原理および方法論の探究であった。本年度はその準備のための基盤づくりを目指した。成果としては、「文化創造」の主体であると同時に客体でもある私たち自身が、互いの関係性の中に「活路」をいかに見出しうるか―それは遠藤隆吉先生による生々主義哲学の基盤に深く関係しうるものとして―に依っていることが確認された。論文や研究発表の体こそとることができていないが、その要となる文化創造の担い手としての〈新たな世代〉の連帯可能性について新たな課題を得ることができた。

大学改革の大きな転換のさなかで、私は大きな波に私たち自身がのるかそるかの地点に立たされていることを感じながら、大学の様々な改革はもとより、何よりも「大学における教育の質と可能性あるいはその限界」について考え、対話し、企図を実践してきた。その結果、「集団的」「定期的「負荷的」「義務的」「継続的」な集団活動に対する学生たちの本心としての―あるいは基礎態勢としての―離散性を確認した。個人主義と個人消費、コロナの生活様式の変容、変容された意識と社会生活における「揺り戻し」の乖離、経済・国際社会の緊迫的状況など、学生たちの意識は明らかに良い意味での〈懐疑と検証〉に基づいた〈自身の生〉へと方向付けをもっている。そのうえで、彼ら自身が「有意義だと思わない」「おもしろいと思ない」「必要だと思わない」「楽しいと思えない」「尊敬できない」ネガティブな要因やその懸念・疑念が生じる件に対して、聡明な判断を持っている。勿論、前からそういう学生はいたが、富にその傾向は大きくなってきていると感じる。

教育改革センターでの「学生の授業評価アンケート」は諸々の配慮のために全体が全体に対して明らかにされていないが、おそらくは、これらの「事実否認」から大学教育の内部的な欠陥や問題認識が停滞されるか見過ごされることになっていると思わざるを得ない。すべてを公開する必要は確かにないが、「大学内部」というものがどこかに寄っている限り、「オール CUC」を標榜することはできないだろう。必要なことは、〈共通認識〉を生み出すことにある。でなければ、「文化創造」はおろか「大学改革」という、本来的に未来志向の教育文化創造は実現しない。

業務として、職務として、確かに果たされるべき責務がありその範囲があって、それらが尊重されねばならない。だが、それは同時に、まず根本としては、私たち自身が生存を助け合っている、助け合う仕組みの中を生き、協力し合う道、共通の危機や課題を認識し、それぞれを活かす方へと互いを認め合うことから始めなくてはなるまい。個人意識を尊重しつつも普遍意識―全体主義ではなく普遍性への生々主義として―を私たち自身が育むことが最も肝要であろう。そのために、日々の職務がある。その根底には、認識違いを含めてなお、双方への尊重と経緯が、それぞれの生に対する個々人そのものが尊重されていなくてはならない。そしてこのことは、明らかに学生に対する姿勢としても同様なのである。　様々な研究・実践的実験・演習・活動を学生と向き合いながら、そこで培われているのはそれぞれの経験や体験、知識や知恵であるとともに、根本的には関係性そのものが編成されてゆく可能性をもっている。故に、「よい授業」そのものが再考されなばならない。

２．著書・論文・学会発表等

学園内で諸活動のみ。公式発表等は特になし。

３．主な経費

調査用 PC の購入。

４．その他の特筆すべき事項（表彰、研究資金の受入状況等）

特になし。

以上

（本文は 2 ページ以内にまとめること）